リアル展

第48回国際福祉機器展 H.C.R. 2021

～173社の機器・用品を見て・触れて・確かめよう！～

日時 2021年11月10日（水）・11日（木）・12日（金）
10:00～17:00（12日（金）のみ16:00まで）

会場 東京ビッグサイト青海展示棟
（東京都江東区青梅 1-2-33）
※過年度（2018年・2019年等）の会場とは異なります。ご注意ください。

リアル展のイベント等ご案内はこちら！
〈http://hcr.or.jp〉

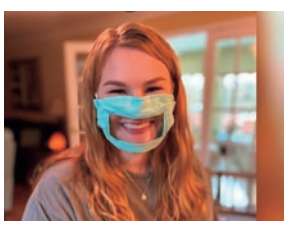
併催イベント

●はじめての福祉機器　選び方・使い方セミナー

基本動作編、自立支援編、住宅改修編の計10分野にわたる福祉機器について、はじめて利用する際に押さえておきたい情報や知識が凝縮したセミナーです。
さらに、福祉施設等関係者へ向けた福祉施設におけるICT活用編を併せて初開催します。
（※Web展での同時配信あり）

●日常生活支援用品コーナー関連企画
新しい日常・多様なニーズ～伝わる マスク展～

コロナ禍において、生活様式が一変した今、障害のある人たちがどんな不便さを感じ、どんな工夫をし、どんなことを望んでいるかを、調査結果をもとにイラストを主としたパネルでお伝えします。
また、コミュニケーションを重んじてさまざまな工夫が施されたマスクとその関連アイテムを展示紹介します。



その他、福祉機器・自助具・介護ロボット等についての各種相談コーナー、被災地支援コーナーを設置します。また、毎回好評の子ども広場では知的障害者・発達障害者の特性に合わせた「住まいの音環境対策ハンドブック」を無料配布します。

新型コロナウイルス感染症対策について

東京ビッグサイト発出の対応指針をふまえて下記による感染症対策に努め、皆様のご来場をお待ちしております。

- 入場事前登録による混雑緩和
- マスク着用・距離確保
- 手指消毒・検温の実施
- 会場内の食事禁止

駐車場のご利用について
本年度は東京オリンピック・パラリンピックの影響により、会場周辺を含め、一般車両向け駐車場がございません。ぜひ公共交通機関を利用してご来場をください。なお、障害のある方や歩行に困難がある方専用の駐車場を確保し、駐車場から会場までのシャトルバスをご用意しています。（スペースには限りがございます）
詳細はこちら▶ http://hcr.or.jp/exhibition/access

特別連載

第1回

コロナ禍での不便さ・ニーズ調査

公益財団法人 共用品推進機構
専務理事
星川 安之 氏

これまでH.C.R.では、「十人十色展」「片手で使えるモノ展」などを実施し、日常生活支援品をご紹介してきました。本号より、この日常生活支援コーナーの発展企画として、公益財団法人 共用品推進機構 専務理事の星川氏による特別連載がスタートします。

コロナ禍において、新しい生活様式への転換が求められる昨今、障害のある方の生活やそれに伴う支援用品の変化の紹介や、取り組みをご紹介します。

また、H.C.R. 2021では会場内に日常支援用品コーナー関連企画「新しい日常・多様なニーズ～伝わる マスク展～」を実施します。H.C.R.ご来場予定の方はぜひお立ち寄りください。

■はじめに

予想だにしなかった新型コロナウィルスの感染拡大は、マスク、消毒液の品不足から始まり、密閉、密集、密接の３密の回避、ソーシャルディスタンスという社会的距離、PCR検査、ワクチン接種など、２年前までは普段の会話には出てこなかった単語が、マスメディアや日常会話で飛び交っています。

そして、コロナ禍における新しい日常のための生活様式が明文化の有無に関わらず定着しつつあります。しかし、感染防止のためのそれぞれの場面での約束事（ルール）については障害のある人たちの中には実行することが困難な場合があります。

東京の杉並区障害者団体連合会（以下、連合会）は、コロナ禍で障害のある人やその家族にとって何が不自由さを感じるのかをアンケート調査で確認しました。

■コロナ禍での不便さ・ニーズ調査

回答者は、連合会に所属する 15 の当事者団体ならびに、杉並障害者福祉会館の利用者、各種イベント参加者などで、合計 204 名。調査期間は令和2年8月から 10 月までの3か月間で行われました。

障害種別では、知的障害関連が 74 名、聴覚障害 30 名、視覚障害 29 名、肢体不自由 28 名、失語症9名、高次脳機能障害7名、難病4名、精神障害3名、その他 19 名です。

設問の「困ったこと」、「工夫したこと」、「良かったこと」、「望むこと」に対する回答は、（1）感染予防、（2）家の外、（3）家の中、と大きく3つに分類されて実施されました。

■感染予防

感染予防について、コロナ禍が始まった当初、マスクや消毒液を購入できなかったことがあげられています。マスクをしないと外出や買い物ができず、ストレスがたまったという人も多くいました。障害のある子どもの親たちは、マスクを手作りしたり、また、マスクを嫌がる子どもにその必要性やつけ方を教えたり、工夫をして乗り切ったようです。

耳の不自由な人たちからは、「マスクをしている人の話は、口の形が見えないので話している内容が分からない」との意見があり、それを解決できるマウスシールドなどはルールによって使わない方針とされている行政窓口もあったとの報告もありました。

■家の外

「人との距離をとる」については、視覚障害者から、ふだんなら声をかけてもらえるがそれがなくなり困難だったと複数の回答があったのも印象的です。

多くの人が「外出を控えた」と答えています。「自粛」生活で太ったり、気力が萎えたという人も多くいました。食料などの買い物に行くときは、注意に注意を重ねて感染防止を図ったようですが、消毒液の場所の把握や間隔を空けてレジの列に並ぶこと、ならびにマスクやビニールカーテン越しの会話が困難だったとの声も多く聞かれました。

視覚障害のある人は、レジの前に並ぶのも大変でしたという声がありました。

■家の中

テレビなどの報道で、コロナ禍におびえた人も多く、家の中での時間を持て余す人も多くあがっていました。個人の工夫としては、近所の散歩とか部屋でできる体操を始めた人も多くいました。

今回のアンケートは、回答された属性とともに 204 名の方からの回答をすべて掲載している「報告書」、報告書のポイントのみを掲載してる「概要版」、204 名の回答を集約しイラストとともに掲載いる「イラスト版」の3種類が作られています。

本調査を主導した連合会の代表である高橋博さんは、「必要に応じて、関係する機関や人に上記のいずれかを渡したり話をしたりしながら、コロナ禍で障害者やその家族が直面した問題点を理解していただき、その解決に向けてともに考えていきたいと思っています」と述べています。

■今後

この調査は、１年前に実施したものですが、本年 11 月の国際福祉機器展には報告が間に合うように、調査のとりまとめを行っているところです。どんな不便さやニーズがあり、それらに応えるためにどんな製品やサービスが必要か、多くの人たちと情報共有しながら進めることができればと思っています。